

*The Mystery of Edwin Drood*に内在する *Our Mutual Friend*

—ジャスパーとヘッドストンの類似点—

吉田 一穂

序

The Mystery of Edwin Drood(1870)は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の15番目の小説で、1870年彼が死んだとき未完で終わった。そのとき、彼は計画した12回の月刊分冊の6分冊まで完成させていた。その6分冊は、ルーク・フィルズ(Luke Fildes, 1843-1927)の挿絵つきでチャップマン・アンド・ホール(Chapman & Hall)社によって1870年4月から9月まで刊行された。チャールズ・オールストン・コリンズ(Charles Allston Collins, 1828-1973)は、月刊分冊のカバーの挿絵をデザインした。この月刊分冊で発表された *The Mystery of Edwin Drood*は、その後一卷本として出版された。

ポール・デイヴィス(Paul Davis)は、この作品について、「ディケンズがどのように小説を終えようとしたのか説明しようと多くの試みがなされたにもかかわらず、*Drood*はディケンズの以前の作品におけるテーマやモチーフの総決算として読める」と述べている(Davis 251)。未完に終わったにもかかわらず、注意深く読めば、*The Mystery of Edwin Drood*にディケンズの以前の作品におけるテーマやモチーフを読み取ることが可能であるが、それと同時に興味を引くのは、犯罪心理である。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)は、「ジャスパー(Jasper)は、ディケンズの突然の死によって、彼の小説における犯罪心理を代表する暴力的な殺人犯人の長い系列の最後となった」と述べている(Wilson 292)。*The Mystery of Edwin Drood*というタイトルから作品が推理小説であることはすぐに推察できるが、ウィルソンが注目しているように、重点は推理小説の謎解きというよりも犯罪心理に置かれている。このことはとても重要なことで、ディケンズは彼のミステリーにおいて、犯罪心理、特にジャスパーの心理を克明に描き出そうとしている。ディケンズの死によって未完の小説に終わりはしたが、作家は残された読者に作品理解の手がかりを残している。その手がかりの中で見落としてはならないのは、前の作品 *Our Mutual Friend*(1865)と *The Mystery of Edwin Drood*に共通点が見られることだ。

本論文では、*Our Mutual Friend*と *The Mystery of Edwin Drood*の共通点を探ることにより、アヘンに依存しなければならないジャスパーの心理とミステリーとの関係についての考察を一步進めたい。

1. ブラッドリー・ヘッドストンとの共通点

ここでもう一人の批評家の見解を見てみたい。フィリップ・ホブスバウム(Philip

Hobsbaum)は、*The Mystery of Edwin Drood*の作品としての性質について、「*The Mystery of Edwin Drood*は、現代の推理小説(whodunit)〔‘Who done it?’(i.e. ‘Who did the crime?’)〕とはかけ離れた作品である。実際我々は誰がそれをしたか、あるいはそれをしようとしたか知っている。犯人はジャスパーである」と述べている。またホブスバウムは、読者がジャスパーの犯罪がどのように暴かれるか知らないことに注目しているだけでなく、*The Mystery of Edwin Drood*における謎がジャスパーの犯罪の暴露ではなく結末にあることを指摘している(Hobsbaum 275)。ホブスバウムの見解は、ディケンズの死によって結末が分からなくなったとしても、ジャスパーを犯人と断定した見解である。

このようにジャスパーを犯人と断定した場合、当然のごとく、読者の興味は彼の心理状態に向けられる。ディケンズは、*Our Mutual Friend*においてすでにジャスパーのモデルとなる人物像を描き出している。それは、ブラッドリー・ヘッドストーン(Bradley Headstone)である。¹学校教師ブラッドリーは、単に知識を増やすことで、低い身分から教師としての地位に上りつめた人物である。ブラッドリーは、第2巻第1章でディケンズが描写しているように、「上品な黒い上着に黒チョッキ、上品なシャツ、上品な正式の黒ネクタイ、上品な霜降り模様の細身のズボン、ポケットからは上品な銀時計がのぞき、それを吊る上品な毛編み紐が首から垂れている。どこからどこまで上品な姿の26歳の青年」(217)である。²一方でディケンズは、ブラッドリーの顔に底知れぬ苦悩の色が浮かんでいることも描写している。その苦悩は、刻苦勉励して知識を学び取ったが、学び取ったものを忘れないため苦悩が絶えないことに由来する。

類似した描写が、*The Mystery of Edwin Drood*にも見られる。ディケンズは、音楽教師であり、クロイスタラム(Cloisterham)の聖歌隊長ジャスパーを次のように描写している。

Mr. Jasper is a dark man of some six-and-twenty, with thick, lustrous, well-arranged black hair and whiskers. He looks older than he is, as dark men often do. His voice is deep and good, his face and figured are good, his manner is a little somber. His room is a little somber, and may have had its influence in forming his manner.

(8)³

ジャスパー氏は26歳ばかりの、顔色の浅黒い青年で、髪の毛も頬ひげも黒く、こわくて、つややかで、よく手入れが行き届いている。色の浅黒い人間にありがちだが、彼の実際より老けて見える。深くていい声の持主で、顔も身体つきも立派に整っているが、態度に影響を及ぼしたのかもしれない。

ジャスパーと*Our Mutual Friend*のヘッドストーンとの類似点は、26歳という年齢と、立派な外見の背後に闇を感じさせる部分が見られることだ。ジャスパーの闇とは、彼の心の闇である。ジャスパーは、フィリップ・コリンズ(Philip Collins)が指摘しているように、彼が

嫌う聖堂のオルガン奏者として、またロンドンの憂鬱なアヘンを吸うたまり場の麻薬常習者として二重生活を送る(Collins 292)。 *The Mystery of Edwin Drood*においてアヘンを吸うたまり場は、東洋との関係性を感じさせる一方で、ジャスパーの抑圧された内面世界のはけ口の場としての意味を持っている。

ジャスパーは、エドウィンに時々我慢できない痛みを消すためにアヘンを吸引していると説明する。さらにジャスパーは、聖歌隊長としての名声を博して教育者としても立派であると言うエドウィンに、「私はそういうのが大嫌いなのだ」(14)、「私の生活の耐え難い単調さのお蔭で、私はじりじりとむしばまれていくのだ」(14)と言う。また、ジャスパーはエドウィンに「聖歌隊の歌を聞いてどう思うかね」(14)と聞く。「神々しい！まるで天上の歌声だ！」(14)と言うエドウィンに対して、ジャスパーは、「私には悪魔の声に思えることがあるのだよ」(14)と言う。ジャスパーは、自分の声がアーチ天井にこだまして戻ってくることに限っては、「それが毎日毎日いやな仕事であくせくしている私を嘲っているように聞こえる」(4)と言う。

このようなジャスパーは、外面と内面が全く異なる人物であることを読者に印象づける。見落としてはならないことは、 *Our Mutual Friend*においてディケンズがヘッドストンの人物描写において、同一人物が異なった人格を持つ様を描いていることだ。次の第3巻第11章における描写は、ヘッドストンの人格が完全に分離していることを示している。

Tied up all day with his disciplined show upon him, subdued to the performance of his routine of educational tricks, encircled by a gabbling crowd, he broke loose at night like an ill-tamed wild animal. Under his daily restraint, it was his compensation, not his trouble, to give a glance towards his state at night, and to the freedom of its being indulged. (546)

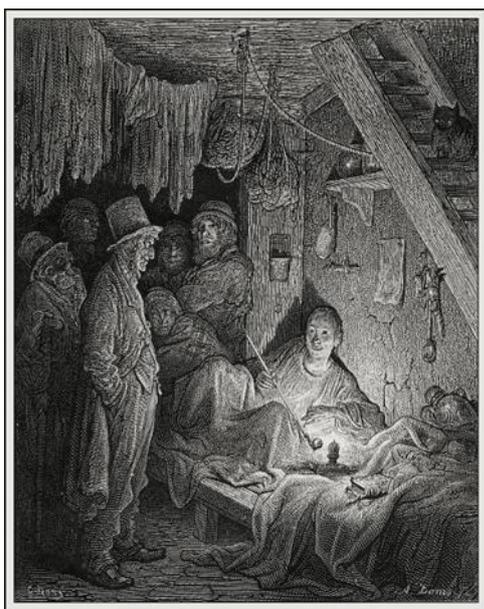
一日じゅう先生然とした態度をくずすことが許されず、小うるさい子供たちに取り巻かれて、読み書きを教える味気ない仕事に縛りつけられたこの男は、夜が来るとまだ野性をとどめる家畜のように外へ飛び出していくのだった。毎日毎日の拘束のもとで、そういう自分の夜の姿と、その思いのままの跳梁をちらと思ひ浮かべるのは、悩みどころかむしろ慰めだった。

ヘッドストンの先生然とした態度と野性が同居している様により、読者はドッペルゲンガーを強く意識する。ヘッドストンは、ロバート・ルイス・スティーヴンソン(Robert Louis Stevenson, 1850-94)の *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* (1886)のハイド氏の側面を自身の内面に隠し持っている。ヘッドストンは過度の自己抑制により、攻撃性を抑圧してきたのだ。

一方、 *The Mystery of Edwin Drood* のジャスパーに関してジョン・グラヴィン(John

Glavin)は、「クロイスタラムの窒息させるような日常の仕事が精神的崩壊に導く」と彼の精神状態について説明している(Glavin 241)。⁴このような精神状態からジャスパーは、アヘンに走ったと考えられる。⁵アヘンとはケシの実から採取される果汁を乾燥させたものである。⁶モルヒネ・コデイン・パパベリン・ノスカピンなど様々なアルカロイドを含み、鎮痛・催眠作用を呈する。これは代表的な麻薬である。慢性中では神経・精神症状が強く、アヘンを渴望し、与えないと禁断症状を起こす(新村 76-77)。アヘンは、快感をもたらす一方で、摂取しすぎると、めまい、吐き気が生じ、次第に血圧と体温が下がり、呼吸が抑制され、呼吸停止によって死亡することもある。*Bleak House* (1853)の第11章で死んでいるネーモー(Nemo)という名の代書人[ホードン(Hawdon)大尉]の死因について、外科医は、「この人はアヘンを飲みすぎて死んだんです」(BH139)と判断する。この作品の中で、ディケンズはアヘンの危険性について説明している。

ディケンズは、アヘン摂取による症状をその他にも知っていたと思われる。彼は、1865年9月20日、女優であり歌手でもあるモールスワース(Molesworth)婦人に手紙を書いている。その手紙の中で、彼はガズズヒル(Gad's Hill)に滞在した音楽評論家ヘンリー・フォザーギル・チャーリー(Henry Fothergill Chorley, 1808-72)が出発前に突然意気消沈した状態になり、とても悲しげにガラスで自分の姿を見ていたので、彼がアヘンを吸引したとの印象を強く受ける。このことは、ディケンズがアヘン服用中の神経・精神症状を知っていたことを証拠づける。ギュスターヴ・ドレ(Gustave Doré, 1832-83)のイースト・ロンドンのアヘン窟の描写では、人間がドラッグによって誘発されるぼんやりした状態に陥っていることを示していることを付記しておきたい。



Opium Smoking—The Lascar's Room
in *“Edwin Drood”* by Gustave Doré

見落としてはならないことは、*Our Mutual Friend*に麻薬に関する部分が見られることだ。チックジー(Chicksey)=ヴェニアリング(Veneering)=ストップブルズ(Stobbles)薬種紹介は、もともとの経営者チックジー、ストップブルズ両氏が、その委託販売人だったヴェニアリング氏に呑みこまれた形の商会である。マイケル・コッツェル(Michael Cotsell)は、「ディケンズが *Our Mutual Friend*で触れたケシの実への投機的取引が、一様に危険であり、評判の悪いものであったと説明している。ミンシング・レイン(Mincing Lane)の生産物に関する取引は、悪名高いものであった。1852年ミンシング・レインへの麻薬取引に関する *Household Words*の記事は、麻薬の積み荷へせり売りに狂ったように走る旧派の仲買人、成長しつつある仲買人、初めての仲買人を描写している。⁷ディケンズは、ヴェニアリング氏が麻薬の調達人であり、麻薬によって財産を築いたことを暗示している。それは、第2巻第8章でテムズ川を父親とささやかな船旅をするときベラが想像しながら言う言葉、「いまパパはあのスマートな 三本マストの船で中国へ行くところなの。アヘンを積んで帰ってきて、チックジー=ヴェニアリング=ストップブルズ商会なんかとは永久におさらばしちゃうの」(318)は、チックジー=ヴェニアリング=ストップブルズ商会が中国からアヘンを国内に持ち込んでいることを示している。

実はアヘンを摂取するという行為の起源はかなり古い。アヘンには、鎮痛、下痢止めなどの作用があった。アジアではアヘンはマラリアの薬として、また、身体の痛みを和らげるために、ヨーロッパ人が来るはるか以前から使われていた。イギリス人はインドにやって来たとき、伝統的医療のひとつとして、「アヘン吸引」(opium eating)が行われていることを知った。しかし、これは彼らにとって驚きでも、東洋的なことでもなかった。イギリス本国でもオスマン帝国などから持ち込まれたアヘンは、16世紀までには薬として使われるようになった(後藤 4-5)。18世紀および19世紀初頭のイギリスではアヘンやローダナム(Laudanum)[アヘンチンキ](アヘンをアルコールに溶かした飲み物=薬)を使用することが広く行われていて、それは禁じられたものではなかった。

ディケンズ自身に関しては、腎臓の疝痛を和らげるため、ローダナムを用いていたようである。1868年のアメリカでの公開朗読の旅では、発作的な喘息で苦しみ眠ることもできず、食欲もなくなった。このときもディケンズは、ローダナムを用いた(Cambridge 122-23)。また、死ぬ少し前にジョージナ・ホガース(Georgina Hogarth)宛ての手紙に「昨夜はローダナムのせいでぐっすり眠れましたが、今日もその影響が重く残っています」(1870年6月12日)と書いているので、この時期にも使用していたようである。⁸

当時の医者は、痛風やリュウマチなどの治療にこれらの薬物を用いたし、アヘンには常習性の危険があることも知られていなかった。アヘンを過剰に摂取すれば中毒という害があるということは知られていたが、それほど大きな問題とは考えられていなかった。アヘンが快楽をもたらしてくれるという側面に目が向けられ、むずかる子供を静かにさせるためにアヘンを与えることも多かったという(後藤 5)。たいていの人が用いたのは、アヘンをアルコールに溶かしたアヘンチンキであった。トマス・ド・クウィンシー(Thomas de Quincey,

1772-1834)の計算によると、アヘンチンキの 25 滴がアヘン 1 グレイン(0.0648 グラム)に相当する。⁹

ロマン派の作家の中では、サミュエル・テイラー・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1832)とトマス・ド・クウィンシーがアヘンの吸飲では有名である。コールリッジは、1801 年頃アヘンを飲み始めていた。一方、ド・クウィンシーの *Confessions of an English Opium-Eater*(1822)は、1821 年 *The London Magazine* に発表され、翌年刊行された。彼は、自分がなぜ一日 8000 滴も使用するように至ったか、そしていかにしてそこから完全に逃れたかを述べている(松下 14-15)。¹⁰第 2 部「アヘンの快樂」でド・クウィンシーは、初めてアヘンを用いた 1804 年の秋まで遡っている。激しいリウマチ性の痛みを頭と顔に感じた彼は、激痛から逃れるため、薬種商からアヘンチンキを手に入れる。アヘンチンキを飲んだ一時間後に現れた効果について、ド・クウィンシーは「何たる恵みか！なんたる激変か！内なる精神の奈落のどん底からのなんたる高揚か！」(90)と表現している。彼は、ぶどう酒とアヘンの違いについて「両者の最たる違いは、ぶどう酒が精神機能を混乱させるのに反し、アヘンは精神機能にこよなく精妙な秩序と規範と調和をもたらすという一点にある」、「ぶどう酒は人からその冷静さを奪い、アヘンは大いに冷静さをもたらす」、「ぶどう酒は判断力を乱し曇らせ、飲む者の侮辱や愛や憎しみに異常な光輝と生々しい興奮を与える。それに反して、アヘンは能動的受動的を問わず、一切の精神的機能に平静と均衡を与える」(94)と説明している。¹¹

ディケンズ自身は、人生において鬱状態に悩まされることがあった。1844 年に彼は、喜劇役者でセント・ジェイムズ(St. James)劇場のピラによると 1837 年に *Mr. Pickwick* でサミュエル・ピクウィック(Samuel Pickwick)を演じたこともあるジョン・プリット・ハーレイ(John Pritt Harley, 1786-1858)に手紙を書いている。その手紙の中で彼は、「耐え難い風邪で鬱状態になっていて悩まされていますので、明日の仕事のため会食を断念せざるを得ません」(1844 年 2 月 18 日)と書いている(*Letters* 4)。また 1847 年にディケンズは、彼が大きな影響を受けたユニテリアン派のエドワード・タガート(Edward Tagart, 1804-58)師宛ての手紙に「*Dombey* と *Christmas Book* にかかりつきりになって生じた鬱状態から回復するためにジュネーブ(Geneva)に行きました」(1847 年 1 月 28 日)と書いている(*Letters* 5)。さらにアメリカ公開朗読の旅の間、風邪をひき、娘のメアリー(Mary, 1838-96)宛ての手紙に「鬱状態にあり、ひどい気分です」(*Letter* 11)と書いている(*Letter* 11)。当時は今日のように抗鬱剤がなかったので、ディケンズは、鬱状態を克服するためサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84)の場合と同じように、¹²長く歩くことで克服しようとした

(Cambridge 128)。心身の健康を保つために歩くことを重視した作家としてヘンリー・デイヴィッド・ソー(Henry David Thoreau, 1817-62)がいる。彼は、「私は一日に少なくとも 4 時間、たいていはそれ以上、いっさいの俗事から完全に解放され、森を通り抜けたり、丘や野原を越えたりして、あてどもなく散策するようにしていないと、自分の健康や生気を保つことができないような気がする」と述べている(Thoreau)。ディケンズもまた歩くこと

の効果を実感していたと思われるが、その他の手段としては、ローダナムによるしかなかったと思われる。

精神に対するアヘンの効果を考えると、耐え難い単調な毎日に嫌気がさしていたジャスパーは、アヘンを用いることによって精神的安定を得ていたと思われる。見落としてはならない点は、*Our Mutual Friend*のヘッドストーンと*The Mystery of Edwin Drood*のジャスパーに相違点が見られることである。その相違点とは、*Our Mutual Friend*では、ヘッドストーンがアヘンの影響を受けていないのに対し、*The Mystery of Edwin Drood*ではジャスパーがアヘンの影響を強く受けていることだ。

ところで、イギリスにおいて反アヘン運動の高まりがあったことを忘れてはならない。第一に、禁酒・節酒運動との関わりからアヘンに反対する者がいた。彼らは、薬物中毒を「快楽にふけて自己管理ができない」個人の性格的な弱さ・道徳的墮落という観点からとらえていた。19世紀中葉のイギリスではミドル・クラスの価値観として自助(セルフ・ヘルプ)、自由放任主義が礼賛され、経済的に困窮することも怠惰など個人の資質上の欠陥に原因があるとされた。アヘンの摂取や中毒も同じ観点からとらえられたわけである。そして、20世紀に至っても、薬物中毒を道徳的墮落とみなす考え方は、それを病の一種とみる考え方と併存していた。病とみる考え方は、19世紀中葉の医学や公衆衛生の進歩によって、薬物およびその副作用や中毒性についての知識が深まることで現れた。また、医者や薬剤師という職業やその団体が確立すると、薬物使用の管理が望まれるようになった。イギリスでは危険薬物は、長くほぼ野放しだったが、1868年には薬事法(Pharmacy Act)が成立し、管理が始まった(後藤 15)。

このようなイギリスにおける状況から、ディケンズがジャスパーを道徳的墮落や一種の病人として扱っている可能性が考えられる。そういうわけでアヘンの影響を受けていないヘッドストーンとアヘンの影響を受けているジャスパーは異なっていると言える。しかし、ヘッドストーンとジャスパーは、両者とも二面性を感じさせる点で共通点を持っている。社会に適合するべく自己を偽りながらも、両者は本質的の自己を意識している。その本質的の自己は、それぞれ女性との関わりにおいて顕現化する。次にジャスパーと女性との関わりについて考えてみたい。

2. ジャスパーの自分を守る物語

エドウィンの婚約者ローザ・バッド(Rosa Bud)は、クロイスタラムの「尼僧院」の女子寄宿舎学院の生徒で、早くに両親を亡くしていた。エドウィンの父親とローザの父親は親友で、二人がまだ幼いときに婚約が取り決められたので、二人はしかるべきときが来たら結婚するのだと互いに思いながら成長してきた。しかし、時が経つにつれ、お互いに愛し合っておらず、親たちの意志に反することではあるが、結婚を願っていないと気づくようになった。

エドウィンの叔父で後見であるジャスパーは、ローザの音楽教師でもある。ジャスパーは

ローザに恋心を抱くが、ローザは自分にとりついて離れないジャスパーに嫌悪感を抱いている。ローザは、次のようにジャスパーの様子をヘレナ・ランドレス(Helena Landless)に伝える。

‘He has made a slave of me with his looks. He has forced me to understand him, without his saying a word; and he has forced me to keep silence, without his uttering a threat. When I play, he never moves his eyes from my hands. When I sing, he never moves his eyes from my lips. When he corrects me, and strikes a note, or a chord, or plays a passage, he himself is in the sounds, whispering that he pursues me as a lover, and commanding me to keep his secret. I avoid his eyes, but he forces me to see them without looking at them.’ (68-9)

「あの目つきでわたしを奴隷にしてしまったの。彼がひと言も口に出して言わなくても、彼の気持ちをわかるようにさせてしまったの。ひと言も脅かしの言葉を口にしないで、わたしは黙ってはいなくてはいけないようにさせてしまったの。わたしがピアノを弾いているときには、わたしの指から絶対に目を離さないの。わたしが歌うときには、わたしの口許から絶対に目を離さないの。彼がわたしの間違いを直して、音や和音をひと節弾くとき、彼自身はその音の中にももっていて、おれはおまえをいつでも恋人として追いまわすが、このことは人に話すなど小声でささやくの。わたし彼の目を避けるのだけれど、その目を見ようとしなくても見てしまうように彼が無理矢理仕向けるの」

ローザの言葉は、彼女に恋心を抱いたジャスパーが彼女に執拗につきまとっていることを示している。ジャスパーの性的衝動は、*Our Mutual Friend*のヘッドストンの性的衝動を思い起させる。リジー・ヘクサム(Lizzie Hexam)に対するヘッドストンの言葉、すなわち、「あなたの近くにいると、いやあなたのことを考えるだけでも自分の中に頼れるものがなくなり、自信もなくなる。自分を抑えることもできない」(395)、「あなたがわたしを引き寄せるんです。私が堅固な牢屋の中に閉じ込められていても、あなたは私を引きずり出してしまおうでしょう」(396)は、リジーが彼にとって性衝動を起こさせる存在であることを示している。リジーの「ノー」という返事が変わらないことを聞いたヘッドストンは、「そういうことなら、おれがあいつを殺さなければいいが！」(398)と言う。このヘッドストンの言葉は、恋のライヴァルを倒したいという本能的な言葉である。

一方、ローザに心を寄せるジャスパーにとって恋のライヴァルは、甥のエドウィンである。彼が純粹に本能に従った場合、ライヴァルであるエドウィンに殺意を抱く可能性がある。そのことからエドウィンを殺したのはジャスパーであると推察できるが、読者は推察できたとしても、作中人物は簡単にジャスパーであると推察できないことに注意しなければならない。

折しもネヴィル・ランドレス(Neville Landless)とエドウィンは激しい喧嘩をする。「ドルード君は少しばかり苦勞の味を知った方がよかったんじゃないかな」(75)、「苦勞の味を知っていれば、必ずしも自分が立派だったためにかち得たわけではない幸運の有難味を、もっと強く感じたかもしれないからさ」(75)、「君の見栄っ張りは我慢できん。君のうぬぼれは耐えられん、まるで自分が世にも稀な貴重な人間みたいな口ぶりだが、実際はありふれたほら吹きなんだ。君は俗な人間、ありふれたほら吹きなんだ」(76)という挑発的な言葉に刺激されたエドウィンは、「君は黒ん坊の俗人間やほら吹きなら、見ればわかるかもしれんが(その方面のお知り合いは、大分広いんだろうね、きっと)、白人の人格をとやかく言う資格はない」(76)と言い返す。ネヴィル自身浅黒い肌色をしているので、こう当てこすられると、彼は怒りを抑えきれなくなり、ワインの滓をエドウィンにかけ、その後グラスを投げつけようとする。そして、ジャスパーに腕を押さえられる。

この喧嘩によって、エドウィンに恨みを抱いたネヴィルが彼に対して殺意を抱いたがゆえに彼を殺してしまう、という因果関係を推察することができそうである。ジャスパーは、この可能性を利用したと考えられる。ジャスパーは、クロイスタラムの聖堂小参事会員であるセプティマス・クリスパークル(Septimus Crisparkle)氏に「恐ろしいできごとを見ました」(79)と言う。「そんなにひどかったのかね」(79)と言うクリスパークル氏に対し、ジャスパーは「殺人沙汰です！」(79)と言う。さらにジャスパーは、「彼は私の甥を私の目の前であやうく殺しかかったのです」(79)と言うだけでなく、ネヴィルの気質にまで触れ、「彼の陰惨な血の中には、何か虎のようなものが入っているのです」(79)とさえ言う。

ここである批評家の見解に目を向けたい。ジャイムズ・ライト(James Wright)は、「ジャスパーが犯罪者であることとアヘン中毒の殺人者であることは、心理学的にも社会的にも重要性のある事実である。二つの意味は、ジャスパーが彼が所属するコミュニティーのとても尊敬されている市民であること、またクロイスタラムの聖堂の尊敬されているオルガン奏者であるという事実と関係がある」と述べている(Wright 274)。ライトが注目している殺人者とコミュニティーの尊敬されている市民であるという関係性は、尊敬されている市民であるがゆえにジャスパーが殺人など犯すはずがないと作中人物に思わせる可能性を読者に感じさせる。尊敬されている市民であるという側面とネヴィルがエドウィンに恨みを持っているかもしれないという事を理由に、ジャスパーが自分を守る物語を作る余地がここに生まれるのだ。ジャスパーが日記に中の「このネヴィル・ランドレスの悪魔のような激情、彼が怒りにかられたときの力、相手を滅ぼさずにはおかぬ兇暴な殺気が私をおびあかす」(109)という部分をクリスパークル氏に見せるのもジャスパーの自分を守る物語の一部であると考えられる。

見落としてはならないことは、*Our Mutual Friend*において、ヘッドストーンがジャスパーと似た行動をとっていることだ。恋のライヴァルであるユージン・レイバーン(Eugene Wrayburn)に殺意を抱いたヘッドストーンは、闇に乗じて背後から襲いかかり、仰向けに川につき落とす。ヘッドストーンはライダーフード(Riderhood)に罪を着せるため船頭姿となり、

犯行後は全く別の姿となる。このことから、ヘッドストーンが自らの犯行を隠そうとしていることは明らかである。ジャスパーもまた、甥（エドウィン）のいくえについて最後に彼と一緒にいたネヴィルを問い詰める。このことによって、ネヴィルに嫌疑が生じる。ジャスパーは、ネヴィルに生じた嫌疑によって犯行を隠すことが可能となる。折しもクリスパークルは、堰の片隅で何か光るのを見、水に入り、E. D. と彫られてある懐中時計とシャツ・ピンを見つける。この発見品を持ってクロイスタラムに戻ると、彼はネヴィルを連れて町長の家に直行する。時計とシャツ・ピンを見たジャスパーは、それらをエドウィンのものであると証言する。一方、ネヴィルは拘留され、彼についての悪いうわさがまき起こる。そのうわさとは、「あの男は復讐心の強い乱暴な性格で、あのかわいそうな妹だけが彼に感化を与えることができるので、妹のいない所に置いといたら信用できない。妹がいなかったら、毎日でも人殺しをやっているだろう」(184)というものである。エドウィンが死んだことを証明する証拠が何も発見されないので、ネヴィルは自由の身になるが、彼は町を出なければならなくなる。町じゅうの人が彼を避け、仲間はずれにしたからである。このことから、ジャスパーが町の人々のうわさを利用して、自身の犯行を隠したと考えられる。

ディケンズは、事件に直接関係のない二人の登場人物の会話によって、事件の深刻さを示している。ロンドンの博愛協会の会長、ルーク・ハニーサンダー(Luke Honeythunder)は、クリスパークルに向かって「ここに一人の男がいて、暴力行為によって地上から抹殺されてしまった。これを何と呼ぶかね」(191)と尋ねる。クリスパークルは、「殺人です」(191)と答える。その後、ハニーサンダーは、「流血！アベル！カイン！わしはカインとは手を組めんぞ。血に染まった手がさし出されれば、わしは身ぶるいしてそれを払いのけてやる」(191)と言う。それに付け加えて、クリスパークルは「十戒に殺すなかれ、とある。殺すなかれ、ですぞ！」(192)と言う。ディケンズは、ハニーサンダーとクリスパークルの会話を通してエドウィンの殺害を神をも冒瀆するほどの罪であることを示している。

一方、クロイスタラムの聖歌隊長であるジャスパーが犯人であることは、作中人物には想像し難いが、薄々犯人がジャスパーだと感じ取っている読者を意識してディケンズが皮肉な意味でクリスパークルに言わせているとも考えられる。十戒はモーセがシナイ山で神から授けられた律法の中心をなすもので、宗教的、道徳的な戒めとしてキリスト教会の根幹をなすものである。聖堂の聖歌隊長であるジャスパーが十戒に背くとは普通は考えられない。作品の最初、第1章で、ディケンズは、「悪人が自分の行った悪から離れて、律法を守り正しいことを行うなら、彼は自分の魂を救うことができる」という旧約聖書エゼキエル書第18章第27節からの句（国教会の祈祷書の中で、朝と夕の祈りの最初の句として用いられている句）を唱える声が大聖堂に響き渡っていることを示している。このことにより、厳粛な教会に密接な関係を持つジャスパーが犯行を行うとは考えにくいのだ。

しかしここで、*Our Mutual Friend*の第4巻第7章のタイトルが「カインになるよりアベルになれ」(“Better to be Abel than Cain!”)となっていることに注目したい。カインとアベルは、アダムとエバの子である。旧約聖書の「創世記」第4章にカインとアベルの話が出

てくる。兄のカインは、弟のアベルの供え物の方を自分の供え物より神が顧みられたことに腹を立て、弟を殺す。ディケンズは、章のタイトルによってリジー(Lizzie)の愛を独り占めしているレイバーンに恨みを持ち、彼を殺そうとしたヘッドストンをカインにたとえている。*The Mystery of Edwin Drood*におけるジャスパーもまた三角関係にあり、ヘッドストンと似たような感情を持つことが推察されるがゆえに、ハニーサンダーの言葉「わしはカインとは手を組めんぞ」(191)は、一見ストーリー展開とは無関係に見えながらも、ジャスパーの犯行を暗示しているとも考えられるのだ。

エドウィンがいなくなった後、ジャスパーはローザに「私はあなたを愛している。愛している、愛しているのだよ。もしあなたが私を棄てたって——そんなことしないでらうね——私から逃げられないんだよ。誰もぼくたちの邪魔をさせないから。私はあなたを死ぬまで追いかけるから」(223)と言っていることから、彼が邪魔になったエドウィンを殺害したことが推察される。ジャスパーは、前もってネヴィルに人々の注目を集めることによって自らの犯行を隠したと考えられるのだ。

結び

以上、*The Mystery of Edwin Drood*を前の作品 *Our Mutual Friend* との共通点から考えてきた。ディケンズは、*Our Mutual Friend* のヘッドストンを変化させてジャスパーを作り、ミステリーのストーリー展開に利用したと考えられる。ヘッドストンもジャスパーも二面性を感じさせる人物であり、立派な外見と職業の背後に闇の部分を持っている。その闇に部分は、二人の女性によって顕現化する。すなわち、恋のライヴァルへの殺意という形で現れるのである。ディケンズは、第20章で「エドウィンが生きていた間、叔父は彼のことばかり考えていたし、その後は、彼がもし死んだとしたら、どうやって死んだのかを絶えず突きとめようとしていたので、こんことは町じゅうの人々に知れ渡り、誰一人として彼が下手人かもしれないなどは、夢にも考えていなかった」(224)と説明している。ディケンズの説明は、エドウィン殺害の犯人が誰であることを暗示する一方で、*The Mystery of Edwin Drood* が人間の心理の闇の部分を描き出す意図を持った作品であることをも示している、と言っていいたいだろう。

注

- 1 フィリップ・コリンズは、ブラッドリー・ヘッドストンを「精神医学のあいまいな領域への研究材料、性的な抑圧により絶望的になった精神分裂症患者、そして感情の爆発(すなわち、てんかん症的精神分裂症の爆発)に陥りやすい精神分裂症患者として描かれている

る」と考えている(Collins 284)。

- 2 Charles Dickens, *Our Mutual Friend* (New York: Oxford UP, 1991), p.217. この作品からの引用は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、間二郎訳『我らが共通の友』(筑摩書房)を参考にした。
- 3 Charles Dickens, *The Mystery of Edwin Drood* (New York: Oxford UP, 1987), p.8. この作品からの引用は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、小池滋訳『エドウィン・ドルード』(創元社)を参考にした。作品の解釈に関しては、小池滋『エドウィン・ドルードの謎』(白水社)も参考にした。
- 4 クロイスタラムの背景は、チャタム(Chatam)近くのロチェスター(Rochester)がモデルとなっている。ディケンズは、ロチェスターで幸福な少年時代を過ごした(Schlicke 393)。
- 5 クレイ・ルートリッジ(Clay Routledge)は、「人生に意味が不足していると感じることによって、人はアルコールや麻薬乱用に走ったり、鬱病になったり、苦悩に陥ったり、自殺に走ったりする」と指摘する一方で、「単に人の傍にいたり、好かれたりするだけでなく、私たちは、人から評価されたり、重要な貢献をしているのだと感じることを必要としている」と述べている(Routledge 10)。
- 6 ケシは南アジアの山岳地帯に生えているが、当時はその地域のほとんどがイギリス帝国領だった。かつてイギリスは中国茶の代金を銀貨で支払い、国際収支が赤字だったが、アヘンの輸出が増えることによって黒字に好転した。イギリスが中国から受け取った銀貨は、1801年から1826年にかけて7千5百万ドルだったが、1827年から1849年にかけては1億3千4百ドルまで膨れ上がった。アヘン販売の利益だけでも莫大だった。イギリスは中国でアヘン販売を促進し、莫大な利益を得た(Rose 190-94)。
- 7 以下が仲買人に関する記事である。

When I expressed my astonishment that men of such undoubted substance as I saw there, should condescend to haggle, like any huskers at an old farthing, I was told that trifling as the differences appeared...at certain seasons, some paltry odd farthing had realized or lost fortunes. (Cotsell 128-29)

- 8 *A Tale of Two Cities* (1859)において、死体盗掘人ジェリー・クランチャー(Jerry Cruncher)は、お祈りをしている妻に対し、「おれはもう、あんなふうにお祈りされるのは我慢がならねえんだ。体は貸し馬車みたいにガタガタしてやがるし、頭はアヘンでも飲んだみていに眠い」(*TTC* 53)と言う。このことから、ディケンズが自身の服用の体験からこの部分を書いていると推察できる。
- 9 イギリスの随筆家ド・クウィンシーは、オックスフォード大学在学中に陥ったアヘン服用の習慣に生涯悩んだ。交友関係については、コールリッジ、ワーズワースと知り合い、グラスミア(Grasmere)にある後者の家に20年近く住み、ここで結婚した(1816)。晩年に

はエディンバラに定住した。ラム、ハズリット等の文人と交わって諸雑誌に寄稿した。偉大な文学者トマス・カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)とも親密な友情を育んだ。1827年、ド・クウィンシーは、カーライルと初めて会見した。3年後の1824年 *London Magazine* 誌上でド・クウィンシーが、カーライルによるゲーテの *Wilhelm Meisters Lehrjahre* の翻訳を手厳しく批判したことがあったが、いまや名声を確立したカーライルはそのことに一切ふれず、二人の会見は始終なごやかであったという。その後ド・クウィンシーは、何度かカムリー・バンク(Camely Bank)にあったカーライルの自宅を訪問している(木村 157)。ド・クウィンシーは、自己の体験を書いた *Confessions of an English Opium-Eater* で文名を確立した。華麗で風韻に富む散文家として知られている(新村 910)。

10 ド・クウィンシーは、ジャーナリストとして生計を立てるため、1821年ロンドンにやって来た。*Confessions of an English Opium-Eater* を出版してもらう予定だった *Blackwood's Magazine* とは手を切り、*London Magazine* にアヘンの体験記を書くべくコベント・ガーデン(Covent Garden)の小さな部屋に滞在場所を確保した。ここで、ド・クウィンシーは、1802年から1803年の冬に書き始めた。そのとき、彼は17歳で、貧しく空腹であるだけでなく、大都市で孤独な状態にあった。デボラ・エプスタイン・ノード(Deborah Epstein Nord)は、若いド・クウィンシーが、ビルドゥングスロマンの世界から離れ、散漫な因習を無視した行動をとる人々が住む地域について語っていることを指摘している。ノードは、「我々は、いかにド・クウィンシーのロンドンの語りが19世紀初期の都会の本質を無意識に説明しているかを見る」と述べている(Nord 42)。

11 ラファエル前派のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti, 1828-82)は、神経発作をアヘンチンキとアルコールで癒そうとした。また、不安を鎮め、仕事を続けるためにアヘンチンキを濫用した(Langlade 89)。

鎮痛剤は1837年の時点では大部分をアヘン剤の新しい調合法が広まるようになり、以前よりも優れた鎮痛剤が開発されていく。クロロダイン(Chlorodyne)は、1848年、ジョン・コリス・ブラウン(John Collis Browne, 1819-84)医師が軍医としてインドに駐屯していたときに生み出されたとされている調合薬である。そして二年後、クロロダインは、製造・販売され始め、イギリスとその植民地の病人たちの苦しみをやわらげるようになった。クロロダインの人気に火をつけたのは、大々的な宣伝活動ではなく、口コミである。1840年代から1850年代に販売されていたほかの多くの薬とは異なり、服用者の気分を本当に良くした。

モルヒネ、アヘン、コカイン、アヘンチンキ、ヘロイン、クロロホルム、エーテル、アスピリン、大麻、これら全てを19世紀の終わりまで、医学的監督もなく薬局でほんの数ペンスで購入することができた。したがってヴィクトリア朝時代では依存症が付きものだった。(グッドマン 42-45)。

ところで、プラータティナ(Platina) [バルトロメオ・サッキ(Bartolomeo Sacchi),

1421-81]は、ワインについて、「ワインは適量であれば、何にもまして速やかに疲れた体を楽にしてくれる。当然のことながら、飲みすぎればひどく有害なものとなる」と良い側面と悪い側面の両方を指摘している（ウィット 202）。プラーティナは、ヴァティカン図書館の初代図書館長として知られている。また、彼が書いた *De honesta voluptate et valetudine* (c. 1466-67) (『正しい食卓がもたらす喜びと健康』) は、印刷刊行された料理書としては最初のものとも言われ、欧州各地で人気を博した。

12 サミュエル・ジョンソンは、憂鬱症を治癒するためリッチモン(Richmond)からバーミンガム(Birmingham)まで往復 30 マイルを歩き通した (中島 19)。

作品

Charles Dickens. *Our Mutual Friend*. New York: Oxford UP, 1991.

———. *The Mystery of Edwin Drood*. New York: Oxford UP, 1987.

参考文献

Cambridge, Nick. “Bleak Health: Charles Dicken’s Medical History Revisited.” *The Dickensian*. No. 505. Vol. 114. Part 2. Ed. Malcolm Andrews. London: The Charles Dickens Museum, 2018: 117-33.

Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: Macmillan, 1994.

Cotsell, Michael. “The Book of Insolvent Fates: Financial Speculation in *Our Mutual Friend*.” *Dickens Studies Annual*. 13. Ed. Michael Timko, Fred Kaplan, Edward Guiliano. New York: AMS P, 1984: 112-130.

Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z*. New York: Checkmark Books, 1998.

Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. New York: Oxford UP, 1991.

———. *Bleak House*. New York: Oxford UP, 1991.

———. *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Madeline House, Graham Storey. London: The Clarendon P, 1965-2002.

Galavin, John. “Dickens and Theatre.” *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Ed. John O. Jordan. Cambridge: Cambridge UP, 2001: 230-250.

Hobsbaum, Philip. *A Reader’s Guide to Charles Dickens*. London: Thomas and Hudson, 1972.

Nord, Deborah Epstein. *Walking the Victorian Streets: Women, Representation, and the City*. London: Cornell UP, 1995.

Quincey, Thomas De. *Confessions of an English Opium-Eater*. Oxford: Woodstock Books,

1989.

Routledge, Clay. "Is this an existential crisis?" *The New York Times*. (June 27, 2018).

New York: The New York Times, 2018: 10,

Schlicke, Paul. "*The Mystery of Edwin Drood*." *Oxford Reader's Companion to Dickens*.

Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999: 393.

Thoreau, Henry David. "Walking." *Collected Essays and Poems*. Ed. Elizabeth Hall

Witherell. New York: The Library of America, 2001: 225-255.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.

Wright, James. "*The Mystery of Edwin Drood*." *Dickens: Modern Judgment*. Ed. A. E.

Dyson. London: Macmillan, 1968: 270-277.

ウィット、デ、デイヴ、『ルネサンス 料理饗宴 ダ・ヴィンチの厨房から』、須川綾子、富岡由美（訳）、原書房、2009.

木村正俊（編）、『文学都市エディンバラゆかりの文学者たち』、あるば書房、2009.

グッドマン、ルース、『ヴィクトリア朝英国人の日常生活 貴族から労働者階級まで 下』、小林由果(訳)、原書房、2017.

後藤晴美、『アヘンとイギリス帝国 国際規制の高まり 1906~43年』、山川出版社、2005.

篠田英雄（編）、『岩波西洋人名辞典 増補版』、岩波書店、1981.

中島俊郎、「ヴィクトリア朝文化におけるウォーキングの諸相」、『ヴィクトリア朝文化研究』
No. 16. 日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2018: 5-47.

新村出（編）、『広辞苑 第六版』、岩波書店、2008.

松島正一（編著）、『イギリス・ロマン主義事典』、北星堂書店、1995.

ラングラード、ジャック・ド、『D. G. ロセッティ』、山崎庸一郎(訳)、みすず書房、1990.

Our Mutual Friend Inherent in *The Mystery of Edwin Drood*
: The Similarities between Jasper and Headstone

YOSHIDA, Kazuho

The Mystery of Edwin Drood (1870) is Dickens's 15th novel, left unfinished at the time of his death in June 1870, when he had nearly completed six of the projected 12 monthly parts. The six parts were published from April to September 1870 by *Chapman & Hall, with the illustrations by Luke Fildes* (1843-1927). Although most of the commentary has attempted to explain how Dickens would have finished the novel, *The Mystery of Edwin Drood* can also be read as the culmination of themes and motifs in his earlier works.

Angus Wilson states that Jasper is by accident of Dickens's death the last of the long line of violent, murdering men, that typify the criminal mind in Dickens's novels. Although we can guess that the work is a mystery story by the title of *The Mystery of Edwin Drood*, Dickens places emphasis not on the solution of the mystery but on the representation of Jasper's mind. In *The Mystery of Edwin Drood*, the opium den may have connections to the Orient, but its primary function seems to be to represent the repressed inner world of John Jasper, so different from his respectable outer appearance as the choir master of the cathedral, a contrast not unlike that between Bradley Headstone's controlled and mechanical respectability as school master and his passionate murderous suppressed self.

What has to be noticed is that Dickens has left a clue to the criminal psychology of Jasper in *Our Mutual Friend* (1865). In *Our Mutual Friend*, Bradley Headstone has risen from low origins to his position as schoolmaster, but his learning is insufficient to enable him to control his passion and jealousy. Eugene Wrayburn and he became rivals for Lizzie's affection. Bradley pursues Eugene up the Thames, spies on his assignation with Lizzie, and murderously attacks and nearly kills him. In *The Mystery of Edwin Drood*, John Jasper is an opium addict and frequenter of Princess Puffer's den in London's East End, although he is choir director at Cloisterham. He is devoted to his nephew Edwin, but he is also secretly in love with Rosa Bud, Edwin's fiancé. Although he tries to implicate Neville Landless in the disappearance of Drood, Jasper himself is the most likely suspect at the close of the unfinished novel.

Jasper and Headstone have two points in common; they are twenty six years old and have dark sides in their minds behind their respectable appearances. Jasper leads a

double life, as organist at the Cathedral which he hates, and as drug-addict in low opium-dens in London, while Headstone breaks loose at night like an ill-tamed animal, tied up all day with his disciplined show upon him, subdued to the performance of his routine of educational tricks, encircled by a gabbling crowd. They reveal their dark sides in their minds when they face triangular love affairs. Dickens not only has left clues to the mystery of the murder in *Our Mutual Friend*, but also suggests that Jasper has a murderous design such as Headstone has.